



「恋人」

石垣りん

きみは真珠のネックレスが欲しくないのか、
という。
ええ、と答える
それからあとは黙ってしまっ
すと心の中で鳥が歌いはじめる
欲しいのよ
ネックレス
私だって娘、
だけどあなたが高いお金を
つかうのが悲しいから
お金のかなしみを知っているから
その品で
身を飾ることができない
そんな心の貧しい娘。
鳥が歌うのをやめると
娘は夢みる、
町のショーウィンドーをのぞいて
あそこに
あの人が私に贈ろうと思った
真珠のネックレスがある。
娘はそれを
架空の首にかける
目がキラキラかやく。



りんさんの第5詩集が出版された。出版社社長田中和雄氏の友情によるものである。りんさんが第5詩集の出版を強く願ったのは、亡くなる半年ほど前であったそうである。

未刊詩集の出版という大事をりんさんから託され、遺族の理解のもとに、未刊詩約350編のなかから40編を選び、題して「レモンとねずみ」(童話屋、1,250円)。

きびしい家庭生活も歌われる。りんさんのかぼそい働きが、かたむいた柱のように支えている。

空襲で家が焼かれなかった時は、いなかの友達が「おじょうさんでした」と言う。家は薪炭商で繁昌し、2階建ての貸家を2棟持ち、女性が外へ出て働かなくてもよかったそうだ。

「恋人」という作がある。

「きみは真珠のネックレスが欲しくないのか、という。…ええ、と答える…それからあとは黙ってしまう…すると心の中で鳥が歌い始める…欲しいのよ…ネックレス…私だって娘…(略)鳥が歌うのをやめると…娘は夢みる(略)架空の首にかける…目がキラキラかやく」

「鳥」というのは自分である。つつましい美しい恋である。

ひとりだけ、「家に来ないか」と言ってくれた人があった、と聞いた。

第1詩集「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」収録の「不出来な絵」は、生前、恋の詩と聞いていた。

「この絵を貴方(あなた)にさしあげます…下手(へた)ですが…心をこめて描(か)きました…

向こうに見える一本の道…あそこに私の思いが…通っております。

(略)下手だからいやですと…言い張ってみたものの…そんな依怙地(いこじ)さを通してきたのが…いま迄(まで)の私であったように…ふと、思われ…それでさしあげる気になりました(略)ああ、この絵は、今年、遺族から南伊豆町へ寄贈された洋画ではないか、とふと思った。美術学校へ行きたい、という希望もあったくらいだから、美術に才能があった。堅い恋だった。

敗戦の1945年、りんさんは25歳。あの時代、男性が少なく、女性トラック一ぱいに男子一人など、冗談が言われた時代である。戦死ということも考えられる。りんさんの恋人は迷宮入りになった。

こながやげんじ
(小長谷源治・現代詩人会)